

「第 1 回未来を拓く人づくり部会」における主な意見

目指す姿 1 秋田の将来を支える人材育成

方向性 1 地域に根ざしたキャリア教育の充実

- ・ ふるさとを愛する心があって、初めてふるさとの未来を切り拓く力が育成される。ふるさと教育に先進的に取り組んできた県として、引き続き、ふるさと教育を推進していただきたい。
- ・ キャリア教育において、多様な職種の体験的な活動を推進することが重要である。秋田の人材を生かした取組を行っていただきたい。
- ・ 高校においては、生徒に対する職場定着支援をしっかりと行っているように感じる。職場定着に向けて、職場の管理者等がどう新入社員を育てていくのかを学ぶ機会が必要ではないか。
- ・ 保育士の離職も 3 年後に壁があり、10 年勤続すると職場定着する傾向にある。アンケートを取ると、仕事自体にはやりがいを感じているものの、人間関係や雇用条件面に課題がある。
- ・ 障害のある方の離職率も高いが、一旦離職してしまうと、次の職場を見つけることが困難であったり、見つかったとしても慣れるまでに時間が掛かったりといった傾向にある。引き続き障害のある方への職業教育を充実させる必要がある。
- ・ 障害のある方に対するテレワーク支援が増えてきていることに鑑み、ICT を活用した訓練や教育が今後重要になると考えられる。
- ・ 高大連携の取組は進んでいると思われるので、今後は、中学生によるオープンキャンパス等、中大連携に取り組むことも重要ではないか。

方向性 2 社会の変化と要請に応える専門教育の充実

- ・ ICT の進展により、個人で出来る範囲とクオリティが格段に広く、かつ、深くなったことから、地域課題の解決に主体的に向かっていく力を授業の中で身に付けさせる必要がある。そのためには、民間のプロの技術者の力を積極的に活用していくことが肝要である。
- ・ ICT 能力は、読み書きと同様、今後、社会で活躍するために必要な基礎的能力である。中・高・大を通じて、プログラミング的な考え方を授業やクラブ活動の実践の中で養っていく必要がある。
- ・ 科学技術をもった人材が秋田の将来を発展させる。引き続き、科学技術人材の育成に取り組む必要がある。

目指す姿2 確かな学力の育成

方向性1 新たな時代に対応する秋田の探求型授業の改善と充実

- ・ICT環境やリモート環境を生かした新しい時代の教育を探す必要がある。小規模校での授業内容の充実、大規模校間の教育交流・研究発表会の合同実施などに取り組むべきではないか。

方向性2 一人一人の教育的ニーズに応じた特別支援教育の充実

- ・特別支援学校の先生は専門性が高いが、一般学校の先生の知識・スキルはまだまだ十分とは言えない。特別支援学校の先生の専門性を高める取組を引き続き進めるとともに、特別支援学校のセンター的機能の更なる充実を図る必要がある。
- ・一般の高校に障害のある方が在籍するケースもあるが、現場の先生もどう支援してよいか悩んでいると思われる。特別支援学校の先生や、場合によっては教育以外の機関とも連携し、「横のつながり」で子どもたちを支援していく体制を構築する必要がある。

方向性3 学びに向かう力を育む就学前教育・保育の充実

- ・小学校への円滑な接続に向けてスタートカリキュラムの作成が重要とされているが、作成自体が目的化され、質的充実につながっていないように感じる。
- ・幼稚園・保育園、小学校、中学校、それぞれの成長・発達段階においてしかできない教育というものもあり、それを踏まえた「接続」が重要である。幼稚園・保育園と小学校が交流し研修会を持ち、保育の中でどのように育て、それを受けて小学校低学年でどう受け継ぎ発展させていくかを考えていくことが重要であり、それが質的充実につながる。

方向性4 学びを支える教育環境の充実

- ・1人1台端末の環境は整備されたが、その活用方法については課題があり、また、学校間の差も大きい。

方向性5 学校・家庭・地域の連携・協働体制の構築

- ・「コミュニティ・スクール」という名称自体は広まってきているが、十分に機能していない印象を受ける。絵に描いた餅にならないよう、取組を充実強化するとともに、しっかりと機能しているかを精査・検証・確認する機能を設ける必要がある。

目指す姿3 グローバル社会で活躍できる人材の育成

方向性1 グローバル化に対応した英語教育の推進

方向性2 学校等における多様な国際教育の充実

- ・ 中学校、高校で海外の生徒と交流する際には、「何を語るか」が重要となる。1つは「ふるさとの良さ」であり、郷土教育を進める必要がある。もう1つは、SDGsであり、どうゴールを実現していくかについて意見を持っていない子どもは、他の意見を持っている子どもと議論が出来ないと思われる。
- ・ オンラインによる海外との交流の可能性を検討いただきたい。小学校高学年であれば、それほど高度な英語の技術は必要なく、自分がどういたメッセージを伝えたいのかというコミュニケーション技術の訓練になる。オンラインであれば、予算をそれほどかけずに実施することができるので、市町村の取組を県でベストプラクティスとして紹介したり、場合によっては、海外の教育委員会に声を掛けたりすれば、大変良い取組になると思われる。
- ・ オンラインによる海外との交流は、英語学習の必要性を感じさせるための動機付けにもなる。
- ・ ICTの活用により、まずは、県内の交流、あるいは首都圏等との交流を深め、その延長として海外との交流を展開していけば良いのではないか。

方向性3 国際理解の促進による多文化共生の社会づくり

(特に意見なし)

目指す姿4 豊かな心と健やかな体の育成

方向性1 規範意識や自他を尊重する心を育む教育の推進

- ・ マスクをした状態での授業は、学生・生徒から返ってくる反応が全く異なる。また、今の2年生は、入学式を行っておらず、5月過ぎから授業を開始した学生たちであり、コミュニケーションが全く取れない状態で学校生活をスタートしている。目には見えないが、心のケアを必要とする子ども・若者が潜在している可能性があることを踏まえて、何が出来るのかを考えていかなければならない。
- ・ インクルーシブ教育とも関連するが、様々な交流により他者を理解することで、自他を尊重する心を育むことが出来るのではないか。様々な関わりや交流の機会を大切にする必要がある。その際は、オンラインの活用も考えられる。
- ・ 全く交流の無い県内の小学校・中学校間におけるオンラインを活用した授業の交流を進めていただきたい。どこかでモデルになるような授業を行って、それを紹介する形で進めるとスムーズに広がりと思われる。

- ・多様性を尊重する態度は、国際交流はもとより、L G B T Qの方々への理解等、日常的にも必要となる。「多様性を尊重する」という言葉を入れていただきたい。

方向性2 インクルーシブ教育システム構築に向けた取組の推進

- ・都心部に近づくほど外国の方や障害のある方を日常的に見かける機会が多く、多様性が高まるが、逆に地方部においてはそうした方々との接点が無くなる傾向にある。共生社会の実現に向け、障害のある方と地域の方々との交流の機会を設けるなど、様々な関わりの機会を創る必要がある。
- ・今の若い世代は、障害に対する理解が非常に高いと感じる。引き続き取組を進めていただきたい。
- ・教育が乳幼児期から一本になりつつあることを踏まえると、乳幼児期から発達に遅れのある方々との交わりの場を作っていくことが大事である。
- ・インクルーシブ教育の不足をI C Tで補うことが出来る。聴覚障害のある方の場合、チャットを使ったオンライン授業も可能である。

方向性3 体力の向上と健康の増進に向けた取組の充実 (特になし)

目指す姿5 地域社会と産業の活性化に資する県内高等教育機関の機能強化

方向性1 多様な資源を活用した教育・研究・社会貢献活動の充実

方向性2 魅力ある大学づくり等による若者の県内定着促進

- ・大学は、コロナの影響により、オンライン授業や、対面式であってもマスク越しの授業を強いられており、学生同士の活発な議論を奨励できる雰囲気がない。どこも苦しい状況にある。

目指す姿6 生涯にわたり学び続ける環境の構築

方向性1 多様な学びの場づくりの推進

- ・障害者の生涯学習は、大変重要な取組であるので、推進していただきたい。
- ・障害のある方もない方も一緒に取り組める生涯学習を推進していただきたい。
- ・デジタル分野は、今後、どんな世代においても逃れることのできない分野であるので、デジタル分野の生涯学習も意識していただくと良いと思われる。
- ・これまでは社会人が大学の授業を受けようと思っても、時間が取れず、退職しないと来ることができなかった。オンラインで授業が提供されれば、例えば午後6時からスマホや帰宅後に自宅P Cから授業に参加することが可能となる。I C Tにより生涯学習の可能性は広がっている。
- ・生涯学習におけるI C T活用を進めるためには、教育委員会が主導的役割を果たす

必要がある。

方向性2 良質な芸術・文化体験機会の充実と文化遺産の保存・活用
(特になし)

(参考) 他の専門部会において出された当部会に関する意見について

- 産業人材を確保するため、中高生に対して、地元の企業を知る機会や仕事への意識付けが出来る場をより多く提供できるよう、県が主体となって取り組んでいくべきではないか。
- 子どもの教育に多様性を認め、学校に行けない子どもたちに対する教育に支援をすれば良いのではないか。
- 県産農産物や郷土食、豊かな自然環境などの本県の魅力、秋田らしいライフスタイルについて、家庭や教育現場で幼少期から意識付けをしてから社会に出ることがふるさとの定着回帰に繋がるのではないか。